

笹川記念保健協力財団 奨学金支援

助成番号：2017-B1004

(西暦) 2017年3月8日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

会長 喜 多 悦 子 殿

2017年度奨学金支援

完 了 報 告 書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

所属機関・職名 東北大学大学院医学系研究科保健学専攻 緩和ケア看護学教室
博士課程1年

氏名 林 忍り子

2017年度奨学金支援（国内）完了報告書

東北大学大学院医学系研究科保健学専攻

緩和ケア看護学教室 博士課程1年

林 ゑり子

東北大学大学院医学系研究科保健学専攻 緩和ケア看護学教室 博士課程1年での学習は、博士論文の研究の計画を立案のための準備であった。2005年3月に修士課程を修了し年月が過ぎてしまったこともあり、修学計画書の通り、博士課程で研究を行うための知識やその他の最新医療について学んだ。個人情報保護教育、健康科学論、社会・環境医学、家族支援看護学セミナーI、家族支援看護学特論を受講し、8単位を取得した。健康科学論では、看護技術のエビデンス、ワクチンによる感染予防、健康科学における疫学の役割、病理で用いられる基本手技、肝動注のエビデンスと海外の動向・動注療法と診断技術、肝炎と発がんについて最新の知見を学んだ。乳癌のバイオロジー エストゲンと乳がん、放射線治療の概要と今後の展望、マウス逆遺伝学と造血発生、MRIの画像化技術と臨床応用について、心臓MRIの臨床応用と有用性、呼吸器疾患（喘息・COPD）の治療薬をめぐって、周産期女性のメンタルヘルス、ストレス、内分泌応答と生活習慣病、一般科患者の精神的問題とその治療など、先進医療の視点より、医療技術の進歩や発達、人々の健康との関連性について専門家の講義を受ける経験ができた。社会・環境医学では、疫学入門、疫学研究デザインの作成、症例対照研究、コホート研究におけるデータ解析、医学統計学序論、臨床疫学 *Clinical Epidemiology* 未来型医療における必要な医療情報基盤、環境生体応答論 分子予防医学、メタ・アナリシスについて、医学経済学、乳児突然死など、博士課程における研究を進める上での基礎となる研究に関する知識や医学統計を学んだ。家族支援看護学セミナーや特論では、米国を中心としたがんで看取りを経験した遺族を中心とした遺族調査結果の文献レビューし、日本国内の状況の比較や研究の動向について探求した。

次に、国内外の緩和ケア領域の研究を知る目的で、9月22日～24日、中国の北京で開催された、**3rd Asian Oncology Nursing Society (AONS) Conference Invitation** において「Difficulties encountered by nurses in the care of terminally ill cancer patients in a community based general hospital in Japan」というテーマで発表する機会を頂いたので、国際学会での発表を行った。さらに、2018年5月24日25日に香港の Yasumoto International Academic Park で開催される予定の **8th Nursing Symposium on Cancer Care** において、Alternations of difficulties experienced by nurses taking care of terminally ill cancer patients at the community based general hospital in Japan after the improvement of the clinical nursing training というテーマで発表する予定である。

博士後期課程における、研究計画は、以下の通りに、現在取り組んでいる内容について報告する。遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究に関しては、がん看護を行う上で、日頃、いくつかの臨床的課題を感じている。特に、一般病院において、がん

終末期患者の「湯船につかる入浴」に関して、以下について明らかにしたいと考え、遺族調査の計画を行った。本調査の目的は、一般病棟もしくは緩和ケア病棟で看取った遺族が最期の 2 週間に入院中に医療者の介助による「湯船につかる入浴」を行った頻度を明らかにする。「湯船につかる入浴」を行った患者の遺族、行わなかった遺族の「湯船につかる入浴」に対する思いや意義を明らかにする。最期 2 週間のがん終末期患者の入浴と遺族の悲嘆との関連を明らかにし、ケアの評価や Good Death の達成、悲嘆や抑うつとの関連を明らかにしたいと考えている。患者に対する介入研究の研究計画書の作成状況に関して、現在、臨床現場へのヒアリング、文献検討を行ったため、次の段階では、予備調査、プロトコール作成などを行う予定である。

最後になりましたが、2017 年度奨学金支援を下さり、大学院生活におきまして、奨学金支援をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。この学ご支援を臨床に還元し、多くのがん患者やご家族に貢献できるように、今後も努めていきたいと考えております。引き続き、ご支援・ご鞭撻を頂戴できますと幸いです。